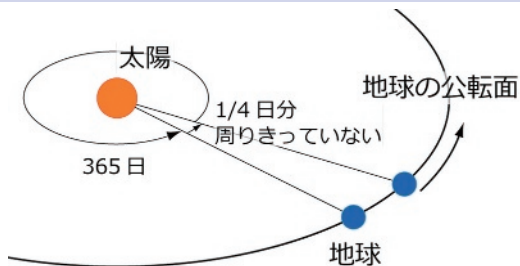


うるう月

うるう年

今年、2020年はうるう年です。季節の変化は地球が太陽の周りを周ることで生じますが、地球の公転周期は365.2422日と、すこし半端があります。このため1年を365日とすると、地球はまだ約1/4日分だけ、太陽の周りを周りきっていないことになります。これが毎年積み重なると、4年で1日のずれが生じ、だんだん暦と季節が合わなくなってしまうです。そのため4年に一度、うるう年を設けて、このずれを修正しているわけです。



地球の公転とうるう年

ところで今年は、旧暦(いわゆる太陰太陽暦)でも、「うるう月」がある年なのです。先月の4月23日が新月で、この日が旧暦の四月一日でした。つぎに新月になるのが今月5月23日です。この日から1か月は、旧暦のうるう四月になるのです。

旧暦

旧暦は月を基準にした暦です。新月の日を旧暦一日として、そこからの経過日数で日付が決まります。新月から2日後が旧暦三日で、この日の月のことを三日月と呼びます。このように旧暦は、月の形と日付が結びついていることから、月を見ればだいたいの日付が分かる点が便利な暦です。

ただ月は、地球の周りを平均29.5日で一周します。つまり、旧暦では1か月の日数は29日か30日になります。すると1年の日数は $29.5 \times 12 = 354$ 日と、365日に比べて11日ほど短くなり、このままだと3年で1か月もずれてしまいます。そのため、時々うるう月というものを設けて、調整する必要があるのです。

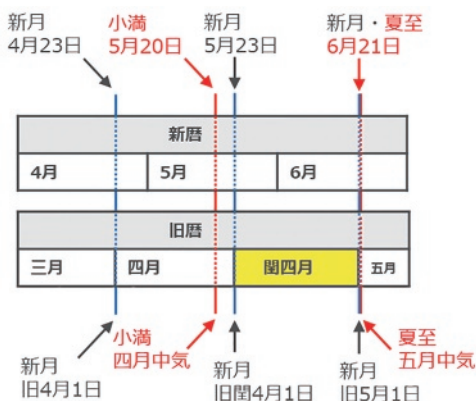


三日月は旧暦三日の月

二十四節気

旧暦で何月かを決める際に必要になるのが二十四節気です。二十四節気とは、例えば春分とか夏至、あるいは立春などの季節を示すのに使われる言葉で、天球上の太陽の通り道である黄道を24等分して決められています。旧暦の何月かは、その月が二十四節気のどの中気を含むかで決められます。例えば4月23日から5月23日の間には、5月20日に四月中気である小満があります。そのため、この月は旧暦四月となります。

一方、5月23日から次の新月である6月21日の間では、6月21日に五月中気の夏至があります。しかし6月21日は新月で一日となり、この日から月が替わって旧暦五月になります。すると5月23日から1か月は、中気がない月ということになってしまいます。そこで旧暦のこの月は、もう一度四月ということで、うるう四月としているわけです。



二十四節気と旧暦の月名

旧暦は日本の季節に合っている？

時々、旧暦の方が日本の季節に合っている、という声を聞きます。例えば、松尾芭蕉の有名な俳句に、「五月雨をあつめて早し最上川」という句があります。五月雨とは本来、梅雨を指すため、これは梅雨の風景の句です。今の暦とはずれがありますが、これはその当時、ちょうど梅雨の時期の夏至を含む月を五月と呼んでいたためであり、松尾芭蕉が現代に生きていたら、「長梅雨を～」などと詠んでいたかもしれません。

旧暦は年によって、おなじ五月でも、新月がいつになるかでかなりずれが生じる暦です。今年は6月21日から旧暦の五月が始まりますが、新月の日によっては新暦の5月末から旧暦の五月となることもあるのです。

旧暦の月を決める際に使用された二十四節気は、太陽の動きだけをもとに決められたものです。その証拠に太陽暦である新暦の日付では、春分といえば毎年3月20日ごろ、夏至は6月21日ごろと、二十四節気と新暦の日付はピッタリとあっています。

現在の暦では二十四節気を意識することは少なくなりました。これは新暦の日付が分かれば、二十四節気を利用する必要がないからともいえます。それを考えれば、現在私たちが使用している暦は、旧暦に比べ遥かに季節に合っている暦なのです。

江越 航(科学館学芸員)